（第三種郵便物認可）

マイウエイ my way

修道生活

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　14

本格的な修道生活は1967年の秋から始まった。ザンクト・ウェンデルから、旧西ドイツの首都ボン近郊の町、ザンクト・アウグスティンの神学院に入り、哲学・神学の勉強を始めた。最初の1年間は所謂「修練期」、カトリックの修道会が入会志願者に課する準備期間であった。修道会のルールと歴史を学び、食事と祈りをともにする、規則正しい生活習慣を身につけることが、その目的である。永平寺等の修行に似ていると思われるかもしれないが、私の印象としては、お寺の修行が厳しそうにみえる。ただし、一生涯独身生活に入る準備期間という、また別な厳しさがあるし、実際に何名の同級生は途中で離脱した。

修道院での演劇（1969年）

祈りと勉強…演劇やバンドも

私がザンクト・アウグスティンに来た頃は、修道院は広い平野の中に建てられ（やはり農場を備えてあった）、遠くからも見えたが、今ではいくつかの町村が合併した市の中心となっていて、その市も修道院の名称、「ミッション・ハウス・ザンクト・アウグスティン」を取って、ザンクト・アウグスティンと名付けられている。どのような経緯があったかは知らないが、それぞれの伝統にプライドを持つ町村を一つの市にまとめるための政治的妥協案ではないかと思われる。丸の内にあった聖霊中学高等学校が瀬戸に移動した先が「せいれいちょう」となり、インドネシアのクパングに「神言会通り」があるのも同じような現象であろう。昭和区の南山町が「なんざんちょう」と呼ばれるようになったのは、後からできた南山学園の影響（迷惑？）であろうか。

修道院での学生生活は祈りと勉強だけではなかった。年間行事の一つにクリスマス頃に上演する劇があった。近隣に住んでいる人を招いての、修道院のオープン・キャンパスであった。私は、ボランティアで監督をしてくれた元女優の指導の下、一生懸命練習して、犯罪を暴く大役を務めていた。また、音楽の活動もしており、バイオリンの練習のほかに、学生同士で軽音楽のバンドも組んでいた。修道院内のお祝いの時や、教会が主催する祭りでの夜のダンス・パーティーでポップス等を演奏したこともあった。その時私が担当した楽器はギターとバス・チューバであった。幸いなことに、その時の録音は残っていないが。